

サー・ウィリアム・テンプル（一六二八—一六九九）

橋 沼 克 美

目次

序

- 一 テンプル家と生い立ち
  - 二 外交官としてのテンプル
  - 三 著作
  - 四 名誉革命と息子の死
  - 五 ムア・パーク
- 結び

## 序

サー・ウィリアム・テンプル (Sir William Temple) の名が今日まで知られているのは、主に次の五つの点においてであると思われる。

- (一) 近世初期の英国の外交官として
- (二) 文人として
- (三) ジョナサン・スウィフトの恩師として
- (四) ドロシー・オズボーンのロマンスの相手として
- (五) 園芸家として

これらの点について簡単に説明しておく。まず外交官としてのテンプルである。テンプルはブリュッセルとハーグ駐在の英国公使または大使であった。チャールズ二世治下の英国の外交史における二つの成果、すなわち、一六六八年のオランダ・スウェーデンとの三国同盟および一六七八年のナイメーヘン講和条約について書かれた大方の歴史書には、テンプルの名前が登場する。<sup>(1)</sup> テンプルはチャールズズの気紛れによって踊らされた大して有能でない外交官という評価が一部にはみられるが、近年の英蘭関係史研究の進展において、テンプルが果たした役割はより正当に評価される方向にある。<sup>(2)</sup>

次に文人としてのテンプルである。彼の著作が一七世紀から一九世紀前半にかけてよく読まれたことは、『著作集』と題するものが、一七二〇年から一八一四年の間に八種類刊行されていることが示すであろう。<sup>(3)</sup> また、十七・十八世

紀の文人たち、エドワード・ブラウン、ギボン、スターンらの蔵書目録にテンブルの著作がみられることも、彼の人氣の傍証となるものと思われる。<sup>(4)</sup>

テンブルの著作は、最も長い『連合諸州論』(Observations upon the United Provinces) (一六七二年)を別にすれば、代表作『雑品集』(Miscellania)三部作の表題が示すように、政治・学問・歴史・医術・園芸など様々な主題を扱ったエッセーが中心である。このほかに、外交官の任務と密接に関わる書簡および回想録がある。十七・十八世紀において、旅行記や紀行文は人氣のあるジャンルであり、異国の事情への関心が高かった。こうした読書趣味を背景に、大陸の文化に通じたテンブルの著作は教養ある読書人たちに歓迎された。また、テンブルの生前から、読みやすく明晰な英語の書き手として彼の文体は高い評価を受けた。<sup>(5)</sup>十八世紀英国文壇の大御所サミュエル・ジョンソンは若い頃テンブルの文体に範を仰いだと、ボズウェルは伝えている。ジョンソンはテンブルの革新性について、「彼は英語の散文に律動(cadence)を与えた最初の書き手である。彼の時代以前にはことばの配列に無頓着であり、文の終りに重要な語が来ようが重要でない語が来ようが、また、どの品詞を最後に持つてくるかは気に止められなかった」と評している。<sup>(6)</sup>しかしながら、十九世紀初めを最後に、テンブルの著作集が新しく編まれたことはない。また、筆者が知る限り、これまで彼の著作が日本語に翻訳されたことはない。欧米では再評価されるには至っていないし、我国では未紹介であるのが現状である。<sup>(7)</sup>

三点目は『ガリヴァー旅行記』(一七二六)の作者として知られるジョナサン・スウィフトとテンブルの関わりである。スウィフトは、世に出る前の若き日を、晩年のテンブルの秘書としてほぼ十年間にわたり過ごした。ふたりの出会いは、スウィフトの母の家系とテンブルの家系の縁故関係に由来する。スウィフトの従兄弟でサー・ウィリアム・ダウナントの孫トマス・スウィフトもまたテンブルの秘書であった。ジョナサン・スウィフトは、テンブルの生

前には『書簡集』の編集を担当し、また彼の死後には、遺稿の出版を委託された。テンブルがスウィフトに与えた文学的思想的影響については、まだその全容が明らかにされたとはいいがたいが、決して無視できるものではない。<sup>(8)</sup>

四番目の点であるが、ドロシー・オズボーン (Dorothy Osborne) とはテンブルの妻となった女性である。ふたりが最初に出会ってから結婚に至るまでの過程は、ピューリタン革命の混乱を背景にした前途多難なロマンスと呼ぶべきものであり、それ自体がひとつの興味深い歴史のエピソードである。ドロシーがテンブルに宛てて書いた書簡が残存しており、近年ペンギン社古典シリーズに新編が加わって、現在までこの才気溢れる若き日のドロシー・オズボーンの書簡は読み継がれている。<sup>(9)</sup> しかしこの場合、テンブルの役割はあくまで付随的なものに留まる。

最後に園芸家テンブルである。イギリスといえば今日、庭園作りが国民的娯楽のひとつとして知られ、日本でも紹介される機会が増えているが、本格的な英国式庭園史をひもとく際に、必ずといっていいほどの初期の歴史に登場するのがテンブルである。これはおそらく、彼のエッセーの中でも一般に最もよく知られる『エピクロスの庭』の文献的価値のためであろう。簡潔に言えば、テンブルはそれまでイギリスで支配的であった、整然とした幾何学的配置を特徴とする庭園観に、東洋的無為自然の美的価値を導入した草分け的人物なのである。<sup>(10)</sup>

今日、テンブルの知名度も一般的評価も高くはない。では、ここでなぜ彼を取り上げるのかといえば、それにはふたつの理由がある。ひとつには、日本でテンブルは未紹介であること。もうひとつは、先に挙げた五つの点も含めて、テンブルという人物を総合的に捉えた研究は英米においても極めて少ないことである。たしかに、テンブルの個々の側面については、頻繁にはいえないが論評はされてきた。しかし、テンブルという人物はその全体像を知ることによって初めて理解可能となり、また、価値のある人物になると筆者は考える。近世の英国文化の担い手が「ジェントルマン」であったとすれば、准男爵サー・ウィリアム・テンブルはそのひとつの典型である。彼の生き方と思想は、

英国の近代化の過程における一章を提示してくれるのではないかという期待が、ここに彼を取り上げる動機である。紙面の制約上十分な論述はできないが、片寄りなくテンブルの人物と思想について紹介できれば幸いである。

一 テンブル家と生い立ち

テンブル家<sup>(1)</sup>

サー・ウィリアム・テンブルの家系は英国のカントリリー・ジェントルマンである。レスタシャーの西端近くの町ウエルズバラ (Wellsborough) の近郊テンブル・ホール (Temple Hall) がテンブル家の発祥の地とされている。この地所はもともと十字軍遠征で名を馳せたテンブル騎士団の所領であり、テンブル家の祖先がこの土地を拝領し、地名を姓にしたと考えられる。知りうる限り最古の祖先はロバート・ド・テンブル (Robert de Temple) といふ、十三世紀初頭ヘンリー三世の時代に遡る。ピューリタン革命の際、チャールズ一世の死刑判決に署名した者の中にはふたりのテンブル、ピーターとジェイムズがいるが、彼らはサー・ウィリアム・テンブルの家系よりも古いとされる、バッキンガムシャーのストウ (Stow) に本拠を置く流れである。アレクサンダー・ポウプの詩『コウバムへの書簡』の主題コウバム伯サー・リチャード・テンブルはストウのテンブル家に属する。ふたつのテンブル家は、もとはレスタシャーの同じ一族が分かれたものと思われるが、正確に知りうる限りでは、十五世紀前半のロバート・テンブルを共通の先祖としている。

サー・ウィリアム・テンブルの祖先で最初に高位に就いたのは、同名の祖父である。このサー・ウィリアム (一五

五五―一六二七)はケンブリッジのキングズ・カレッジに学び、ラムス派論理学者として知られる。彼はサー・フィリップ・シドニーがフランドルの地方行政官として赴いた際に秘書として随行し、ズートフェンにおけるシドニーの戦死をその腕の中で看取ったといわれる。その後、ウィリアムは二代エセックス伯ロバート・デヴルールの秘書となったが、不運にも主は大逆罪で処刑されることになる。しかしウィリアムは、プロテスタントの子弟の高等教育機関としてエリザベス一世が創設してまだ三十余年のダブリン大学トリニティ・カレッジの学寮長の職を得る。彼はこの地で、同名の孫の誕生より一年余り前に生涯を閉じた。テンブル家とアイルランドとの縁は以後続くことになる。

我々の主題の父サー・ジョン・テンブル(一六〇〇―一七七七)はアイルランドで生まれ、ダブリンのトリニティ・カレッジに学んだ後、チャールズ一世に仕えた。ジョンは高名な医師と聖職者を家系に持つハモンド家の娘と結婚したが、このことは祖父ウィリアムの血筋と相まって、サー・ウィリアム・テンブルの恵まれた知的環境の要因となつたものと思われる。一六三〇年頃ジョンはナイト爵に叙せられる。一六四〇年にはアイルランド法務記録長官(Master of the Rolls)となり、枢密院にも席を置いた。内乱の際には議会派側についたため、記録長官の職を剥奪され、ダブリン城に幽閉されたが、一年ほどで釈放され、一六四六年には英国庶民院の議員となった。同年、ジョンは『アイルランド反乱史』(*The Irish Rebellion*)を世に出した。カトリック教徒によるプロテスタント教徒の虐殺を描いたこの書物は、英国人に反アイルランド感情を植えつけたといわれる。ジョンは知的好奇心よりも世に長けた人物で、クロムウェル政権時には、没収したアイルランドのカトリック教徒の土地の払い下げに関する調査の任務に当たり、その功績により自らも相当な財産を築いた。王政復古後も記録長官の職を続行し、カローウ州代表の議員として息子ウィリアムと共にアイルランド議会の議員を勤めた。晩年には副出納官の地位を与えられたが、一六七七年に没し、父ウィリアム同様トリニティ・カレッジの礼拝堂に埋葬された。

## 生い立ち

サー・ウィリアム・テンブルはジョンの長男として一六二八年にロンドンのブラックフライアズに生まれた。下に六人の弟妹がいたが、成年まで存命したのは三人の弟と妹ひとりである。次男ジョンは法律家の道に進み、一六六〇年にアイルランド法務次長 (Solicitor General)、翌年にはアイルランド議会の議長、さらに一六九〇年にはアイルランド法務長官 (Attorney General) となった。このジョンの息子ヘンリーは初代パーマストン子爵であり、その三代目ヘンリー・ジョン・テンブル (一七八四—一八六五) は英国首相となった。三男ジェームズは、ヴェナブルズ陸軍大将の対スペイン西インド遠征に随行し、一六五五年ハイチで戦死した。四男ヘンリーと長女マーサは双子であるが、母メアリは出産の八日後、ケント州ペンズハーストにある兄の家で亡くなった。ヘンリーは裕福な家柄の娘と結婚したが、長男ウィリアムより一年ほど早くこの世を去った。長女マーサは十歳上の長男ウィリアムとは切っても切れない縁にある。マーサは一六六二年サー・トマス・ギフォード (Sir Thomas Giffard) と結婚したが、わずか一か月足らずの内に未亡人となり、以後ウィリアムの一家と共に暮らすことになる。マーサは一七二二年八十四歳でこの世を去った。彼女が一六九〇年に書いた『サー・ウィリアム・テンブルの生涯と人物』(The Life and Character of Sir William Temple) は、彼の一生のほとんどの部分を間近に観察した妹による最も早いテンブルの伝記である。コートニーによるテンブル伝 (一八三六年)<sup>(12)</sup> が出るまでのおよそ一世紀の間、彼女の略伝がテンブルの著作集の諸版に付され、正伝として機能していた。

サー・ウィリアム・テンブルは十一歳で母をなくすが、その前後の二、三年間は、母の兄でペンズハーストの教区

牧師であったヘンリー・ハモンド博士の許で教育を受けた。ピューリタンとアングリカンの対立が激化した時代であったが、ハモンドはアングリカンの立場を貫いた。オクスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジの寮長になったジョン・フェル (John Fell) によれば、ハモンドは謹厳実直な説教師・学者であり、熱心な教育者であったという。<sup>(13)</sup> ハモンドの居所ペンズハーストは、サー・フィリップ・シドニーの生家であり、ベン・ジョンソンが詩の中で讃えた場所である。少年期の一部をここで過ごしたテンプルは、田舎屋敷と庭園の甘美さを印象づけられたと思われる。

母の死に伴い、テンプルはハートフォードシャーのビショップス・ストリートフォードにあるグラマースクールに遣られ、リーという名の教師にラテン語とギリシャ語を学んだ。十六歳の時、ケンブリッジのエマニュエル・カレッジに自費学生 (fellow commoner) として入学したが、指導教官は後にケンブリッジ・プラトニストのひとりとして知られたレイフ・カドワース (Ralph Cudworth) であった。この頃父ジョンは経済的に困窮しており、長男の学費を工面するのに苦労したという。カドワースの宗教観は合理的なもので「広教会派」(Latitudinarian) と呼ばれるが、宗教的寛容主義に賛同する後のテンプルの宗教観に影響を与えたともいわれる。マーサ・ギフォードによれば、テンプルは論理学や哲学の勉強よりも、テニスなどの娯楽に耽って大学時代を過ごしたというが、テンプルは後に大学選出の国会議員になったこともあって『雑録集第二部』を「育ての親」(alma mater) と呼ぶケンブリッジ大学に献呈している。因に、エマニュエル・カレッジは十七世紀前半にはピューリタンの牙城として知られたが、テンプルが在籍した頃にはそのような特色は弱まっていた。また、このカレッジはスウィフトの代表作の主人公レミュエル・ガリヴァーが学んだ所である。

当時のジェントルマンの子弟の多くがそうであったように、テンプルは学位を取らずにエマニュエル・カレッジを



離れ、大陸旅行に出た。一六四八年、フランスに向かう途中、テンプルはワイト島を経由した。そこには、母方の伯父サー・ジョン・デインリーが住んでおり、また、その甥ロバート・ハモンド大佐が、キャリズブルック城に幽閉されていた国王チャールズ一世の警備に当たっていた。このときテンプルは国王に接見した可能性があるが、彼自身にとってより重要なのは、後に妻となるドロシー・オズボーンに出会ったことである。ドロシーは兄と共に、ガンズリーの知事で当時サン・マロにいた父親に会いに行く途中であった。兄は熱烈な王党派であり、ハモンド大佐の国王に対する無礼な振舞に憤って、宿の窓ガラスにダイヤの指輪で次のように書いたといわれる。「ハマンはモルデカイのために用意した絞首台で縛り首にされた。」これは旧約聖書エステラ書の記事に因んでハモンド大佐を侮辱したものであり、兄は直ちに捕えられたが、妹ドロシーが勇敢にも自分がやったことと主張したため、ふたりとも難を逃れた。テンプルがこのような気概のある美しい女性に魅かれたのはこのときだったといわれる。ハモンド兄妹に同行し、サン・マロに滞在していたテンプルは、父の命令でしぶしぶパリへと向かい、フランスで二年を過ごす。その後オランダ、フランドル、ドイツを訪れ、六年に及ぶ大陸旅行を終えて帰国する。

テンプルとドロシー・オズボーンは一六五四年のクリスマススの日に結婚するが、ここに至るまでの七年間は、双方の家同士で結婚する当事者たちへの財産分与の点で折り合いがつかず、紆余曲折の連続であった。同年三月にドロシーの父親サー・ピーターが死去し、障害は取り除かれたかに見えたが、その後はテンプルの父と、ドロシーの父親代わりの兄ヘンリーとの間での婚姻争議となり、結局、結婚後七カ月ほど経ってからやっと、ヘンリーが婚姻契約に同意して一件は落着いた。<sup>(14)</sup>

テンプルとドロシーは、結婚後まもなく互いの友人サー・リチャード・フランクリンのハートフォードシャーにある屋敷ムア・パークで過ごした。ふたりはその後、ロンドンやレディングで一、二年過ごした後、一六五六年にテン

ブルの父と家族がいるアイルランドに向かった。父親ジョンはクロムウェル政権の許、アイルランドのカトリック教徒から没収した土地のプロテスタント教徒への分譲政策を担当していた。ジョンは役得で、自らアイルランド各所に土地を得ていたが、主にダブリンとカーロウに住んでいた。ウィリアムはカーロウの地所の管理を任された。この地でテンブルは親しい友人との交際がなかった代わりに歴史と哲学の書物を読み耽り、後年の著述に大いに役立ったという。この頃のテンブルについて、マーサ・ギフォードはこう記している。「父と共にカーロウ州選出の「アイルランド議会」議員になり、しばしば議会をけんけんがくぐくの議論に巻き込んだ。というのも、彼が議会のどの政党や党派にも決して属さず、誰を怒らせようが喜ばせようが意に解さなかったからである」<sup>(15)</sup>。

六年間にわたるアイルランド生活は、一六六二年の渡英をもって終りを告げた。外交官としてのテンブルの経歴が始まるのはこの時からである。一六六四年にテンブルは父の記録長官の職を相続するが、これは実入りの良い閑職であって、これ以後テンブルがアイルランドに渡ったのは、一六七三年の数ヶ月だけである。<sup>(16)</sup> テンブルはアイルランドの産業振興のためのパンフレットを書くなど、この国に強い関心を抱いてはいたが、基本的には英国の植民地における不在地主であった。

## 二 外交官としてのテンブル<sup>(1)</sup>

テンブルが外交官として公務に就いた頃のヨーロッパ情勢について簡単に記しておく必要がある。世紀前半にはヨーロッパ内に領土を広げていたハプスブルク家スペインが最も勢力をもっていたが、三十年戦争、一六四八年のネーデルラント北部六州の独立、そしてルイ十四世のフランスの勢力拡大などにより、その勢力は大分弱まっていた。カ

トリック圏ではフランスがハブスブルク家スペインを凌駕しようとしていたし、プロテスタント圏では英国とネーデルラントが覇権を争っていた。勢力地図において鍵となるのは、ネーデルラント連合諸州である。ネーデルラントは優れた海運国であり、新大陸とアジアに数々の貿易拠点を有し、また、海軍力にも秀でていた。これに対抗するかのように、英国はネーデルラントと海上覇権を争った。クロムウェル政権時、英国は航海条令を定めてオランダ船の入港を禁止し、また、海戦を交えもした。王政復古後も対ネーデルラント政策は継承され、さらに二度の戦争を行なった。

しかし、チャールズ二世の対外政策は、基本的に親カトリック、親フランス的であり、ほぼ時を同じくして政権の座に就いた太陽王ルイ十四世の拡張政策に沿うものであった。その一方で、英国議会内部では、国王追随派と対カトリックないしプロテスタント支持派との間で勢力が拮抗していた。少数の共和主義者たちは別にしても、王政支持者たちの中にもカトリック寄りの国王の対外政策を必ずしもよしとしなかった者が少なからずいた。ヘンリー八世以来プロテスタントイイズムを国教としてきた英国の国体が、王の気紛れでカトリックに逆戻りするようなことは避けるのが望ましかったし、また、隣国フランスの急激な勢力拡大に歯止めをかける必要が、プロテスタント諸国にはあった。英国が置かれたこのような国際情勢の中で、テンブルは国王支持、反フランス、プロテスタント諸国協調の立場をとった。

一六六四年、テンブルは父親の職アイルランド司法記録保管官の相続を国王チャールズ二世より許可された。この際テンブルの後ろ楯となったのは、アイルランド総督オーモンド公（ジェイムズ・バトラー）で、オーモンドは大法官クラレンドンと國務卿ヘンリー・ベネットに推薦状を書いた。テンブルは外交官として国家に奉仕したい旨をベネットに告げたが、北ヨーロッパの国は希望しないことも併せて伝えた。たまたまスウェーデン宮廷の公使以外に空い

てるポストがなかったので、テンプルはロンドンで一年余り私人として過ごす。

翌年、第二次英蘭戦争（一六六五—一六六七年）が勃発した。この年六月のある日の早朝四時、テンプルは引越したばかりのサリー州リッチモンドのシーンの屋敷で、アーリントン卿（ヘンリー・ベネット）の使者によって寝ている床から起こされた。伝言は直ちに会いに来いというもので、テンプルはアーリントンの家に向かった。そこでテンプルは、極秘かつ緊急な外交折衝の任務を要請された。興味深いことに、任務を引き受けた後でテンプルはその中味について聞かされた。その任務とは、ドイツのミュンスター司教との連合諸州侵略協定の締結である。テンプルは特使としてミュンスター司教と折衝し、協定を締結したが、ミュンスター司教は英国との協定をすぐさま反故にして単独で連合諸州と和平協定を結んだ。これを知ったテンプルは急いでブリュッセルに戻り、スペイン領ネーデルラント総督カステル・ロドリゴとミュンスター司教との間に、後者の兵力の一部を前者に貸すように取り決めた。これによって、一六六六年一月に始まる英仏戦争の形勢において、ミュンスター司教の兵力の助けをルイ十四世が十分に生かせなかったという点で、少なくとも英国の不利に働く要因を減少させることができた。しかしながら、最善を尽くしたとはいえ、テンプルが当初の目的を達成できなかったことは事実である。このような英国の対外政策における失敗は、政府首脳部の責任と一般にはみなされ、そのためクラレンドンは失墜した。しかし、テンプル自身は任務を忠実に遂行した功績を国王に認められ、准男爵の称号を与えられた。

### 三国同盟

第二次英蘭戦争は、デ・ロイター率いるネーデルラント海軍がテムズ河を遡上しチャタム（Chatham）の造船所

を攻撃する事態にまで達した時点で、英国は講和条約を締結せざるを得なくなつた。テンブルは条約締結には直接関与せず、妹のマーサとオランダを訪問した。この国の強さはその自由な精神にあることをテンブルは実地に学んだ。「あらゆる公の問題に関して万人が思ったことをあげすけにいう異様な自由さ」に強く印象づけられたと、テンブルは記している。<sup>(2)</sup>このオランダ訪問の際、テンブルは連合諸州の法律顧問(Grand Pensionary)デ・ウィットと会見した。そこでふたりは、両国の共通の利害、すなわち、フランドルをフランスの侵略から守ることを確認した。この折衝は最終的に、英国・オランダ・スウェーデンの三国同盟へと結実した。この頃のネーデルラントの国内情勢は英国同様錯綜していた。基本的には連合諸州と王家であるオレンジ家が、国家掌握権を争っていたのであるが、一六七二年のデ・ウィットの失墜および一六七七年のオレンジ公とメアリの結婚によって、支配権は王家のものとなった。一六七二年に始まる対仏戦争はオレンジ公が軍隊を指揮したが、この役割は名譽革命以後まで継続されることになる。

#### オレンジ公の結婚

オレンジ公とメアリ・スチュアートの結婚は、名譽革命を導く布石という意味で、英国の運命を左右する出来事であったが、これにはテンブルが一役買っている。気まじめな武人であったオレンジ公が周囲の声もあって身を固めることを考えたとき、個人的に相談したのはテンブルであった。一六七六年四月、オレンジ公は英国人女性との結婚を考えていること、そして、ヨーク公(後のジェイムズ二世)の娘メアリを特に候補に挙げていることを、ホンスラーダイクの庭園に招いたテンブルに打ち明け、彼の意見を求めた。テンブルは英国の王位はプロテスタントによって継承されるべきと考えていたから、この結婚計画には賛成した。また、個人的にはメアリの人柄についてはわからな

ったが、彼女の家庭教師をよく知る妻のドロシーと妹のマーサによれば、メアリはとてもしつけのよい子であるらしいと、テンブルはオレンジ公に告げた。<sup>(3)</sup>

翌一六七七年九月、オレンジ公は英国を訪問し、メアリと直接に会う機会を得た。一目で結婚相手と考えていた人を気に入り、オレンジ公はチャールズ二世とヨーク公に結婚を申し出た。だが、英国王室側は仏蘭戦争のオランダ側に不利な和平協定条件を呑むことを先決事項とし、結婚を認めようとしなかった。このときのオレンジ公は「今まで見たことがないくらい塞ぎこんでいた」<sup>(4)</sup>と、テンブルは記している。しかしながら、オレンジ公の断固とした決意が結局はチャールズの心を動かした。オレンジ公は、チャールズとは親友か仇敵のどちらかになるしかない、テンブルを遣わしてチャールズに伝えた。オレンジ公の決意のほどを知ったチャールズは、公に他意のないことを信じて結婚を許可した。

オレンジ公とメアリの縁談が秘密裏に行なわれたことをテンブルは強調する。その理由は、駐英フランス大使とアーリントン卿に悟られずに事を運んだからである。フランスにとつて、同盟国ないしは傘下と目論んでいた英国が、眼下の敵であるオランダと皇室結婚を通じて手を組まれることは明らかに承服しがたいことであった。また、三国同盟をドゥヴァの密約によって反故にし、実直なテンブルを欺いたかつての恩師アーリントンにとつては、この度のテンブルの手管は見事な仕返しとなった。このような離れ業をテンブルに可能にさせたのは、オレンジ公との個人的な信頼関係である。フランスをヨーロッパの勢力均衡の上で脅威とみなし、プロテスタント諸国同盟を英国の外交政策の基本方針と考えたのは、国王チャールズではなく、國務卿ダンビー（トマス・オズボーン）によるところが大きい。ダンビーの義理の従兄弟でもあるテンブルは、そのような方針の賛同者であり実行者であった。オレンジ公の婚姻は翌一六七八年のナイメーヘン講和条約へとつながった。

政界からの引退

ナイメーヘン講和条約の調印者として連合諸州大使およびナイメーヘン全権大使として赴いたのが、外交官としてのテンブルの最後の仕事であった。この任務の後、テンブルは國務卿の職をダンビーからも國王からも依頼されたが、健康を理由に断った。テンブルは痛風を患っており、『モクサによる痛風の治療』を書いたのもこの頃である。しかしながら、辞退の理由は健康というよりは、王位継承排除法案で揺れ動いていた議會をまとめるのは困難と判断したためであろう。

テンブルが行なった最後の注目に値する公務は、枢密院の改革である。構成員を三十人に減らすことにより、肥大していた枢密院の機能を回復させること、そして、しばしば対立していた國王と議會の宥和を念頭に置いた人選によってこれを構成することがテンブルのプランだった。しかし実際には、國王はテンブルだけでなく、彼と意見を異にする政治家たちにも相談して改革案を進めたので、結果的にはテンブルが意図した形では実現しなかった。特にテンブルが不満だったのは、モンマス公を王位継承者に擁立してヨーク公の排除を画策していたシャフツベリ伯が選ばれたのみならず、議長に任命されたことだ<sup>(5)</sup>。

一六七九年五月の庶民院議會解散後、テンブルはケンブリッジ大学選出議員として当選する。翌年の一月に再び解散されるまでの四カ月間、テンブルは議會で目立った活動をしていない。王位継承を巡る議會内の派閥の対立は頂点に達し、さすがのテンブルも調停を諦めたようである。次の選挙にテンブルは出馬しなかった。さらにこの頃、枢密院のメンバーからテンブルと、彼の理解者であったサンダーランド伯とエセックス伯の名が外された。この年の終り、

テンブルは公務からの引退を決意する。直接の動機は前述のとおりだが、間接的な動機として考えられるのは、外交にせよ国内の政務にせよ、テンブルが自ら欲して選んだ道ではなかったことである。『回想録第三部』においてテンブルは職歴を顧みながら、自分の気質・性向は宮廷の洗練や政界の栄達の野心とは合いそぐわなかったと表明している。<sup>(6)</sup>

### 三 著作

テンブルの初期の著作『ネーデルラント諸州考察』（一六七二年）は、オランダの政治・文化・習俗を的確に捉えた観察であり、英蘭関係史上必須の文献であるばかりでなく、一国に関する外国人からみた客観的叙述としても評価が高い。<sup>(7)</sup>

しかしながら、テンブルは基本的にエッセー作家であって、その全容は『雑録集』三部作にみられる。第一部（一六七九年）には『スウェーデン、デンマーク、スペイン、オランダ、フランスおよびフランドル官見』、『統治の起源と本質』、『アイルランド貿易振興論』、『過度の嘆きについて』、『モクサによる痛風の治療論』などが収められている。第二部（一六九〇年）は『古代近代学問論』、『エピクロスの庭』、『英雄の徳』、『詩論』から成っている。第三部（一七〇一年）は『民衆の不满について』、『健康と長寿』、『古代近代学問論弁護』などを収録している。

様々なトピックについて個人的な感想を述べるエッセーというジャンルの開拓者はモンテーニュであるが、その愛読者であったテンブルは英国におけるこのジャンルの開拓者のひとりであったといつてよい。フランシス・ベーコンがテンブルより一世紀先だつて『エッセー集』を世に出し、この作品がよく読まれたのはいうまでもない。テンブル



のエッセーがベイコンの薫陶を受けているのは明らかである。「善性、生まれつきの善性」、「生れのよき」、「扇動と騒動」、「王国と国の真の偉大さ」、「養生訓」、「庭園」、「名譽と評判」、「栄枯盛衰」などのベイコンのトピックは、テンブルのエッセーの随所にその反映が認められる。しかし、ベイコンのエッセーが断片的・箴言的で漠然としているのに対して、テンブルのはよりモンテニユに近い、個人的な感想を基にして十分に敷衍した考察となっている点で、英国におけるこのジャンルの開拓者というにふさわしい資格を備えている。<sup>(2)</sup>

テンブルの著作に一貫するテーマは、よい統治とは何かという問題である。十七世紀は国家論の隆盛をみた時代である。ボダンやフィルマーが絶対王政の国家観を唱え、ハリントンが共和制の国家観を提示し、そして、ホッブズとロックがそれぞれに国家契約論の理論化を試みた時代である。これらの思想家たちを前にすると、テンブルの経験論的・常識論的見解はかすんでみえるかも知れない。しかし、抽象的・体系的思想のみが歴史を動かすわけではないし、そうした図式化とは異なる極めて現実的な思考法が英国人の特徴だとすれば、テンブルはその意味で正に英国的な思想の持ち主なのである。

テンブルの国家観ないし政体論は、基本的に折衷的である。一方には彼が親しんだギリシャ・ローマの古典的道德哲学の思想があり、他方には同時代の政治哲学や歴史論の議論を反映した「近代的」な思想がある。よき国の成立する条件としてテンブルが考えるのは、賢き君主が君臨し、賢明な助言者たちが存在し、国民に普く道徳教育が行き渡っていることである。このようなよき国の例は西洋にも存在したが、テンブルは殊更西洋以外の事例を好んで引いている。このような視点は、往々にしてキリスト教中心主義的（したがってヨーロッパ中心主義的）議論に陥りやすい十七世紀の思想風土にあっては新しいものだし、また、比較文明論的な視野は十八世紀のフィロゾフたちにつながる「近代性」を感じさせるものである。<sup>(3)</sup> 以下では、テンブルの統治論をより具体的にみることにする。

『統治の起源と本質』(An Essay upon the Original and Nature of Government)は、テンプルのエッセーの中でも最初期に属し、そこには彼の政体観の骨子がみられる。人間性は時代と場所を問わず不変だが、風土の影響によって、それぞれの場所で異なる独自の習慣・教育・観念・法律が発達すると、テンプルはいう。<sup>(4)</sup>しかし、それぞれの国には「自然な政体」があつて、それが侵略や内乱によって一時的に改変されることはあつても、長期的にみればまたそこに立ち返る傾向がある。高緯度地方では専政が発達しやすく、より気候が穏和なヨーロッパのような地域では共和政が発達しやすい。このように論じるテンプルの統治論は、人間の本性、自然な政体、風土の三つの概念を基本的な要素としている。テンプルが考える統治の起源は、家族における父権である。国家とは「同じ血筋に由来し、同じ国に生まれた、同じ政体の下で暮らす多数の家族」<sup>(5)</sup>のことであるから、その長は父権によって權威を保ち、長子にそれが受け継がれる。長子が徳に欠け、家族の信用を失うような場合には、一族會議で相続権の次位の者か、より下位ではあるが資質を備えているとみなされた者が次の長に選ばれる。こうして自然な父権の力は弱まり、寡頭政・民主政ひいては混乱を生じる契機となる。

父権国家に対して、より「人工的な」政体は共和政である。共和国の起源は自由都市であり、一人の立法者あるいは建国者によって創始されてきたと、テンプルはいう。古代における自由都市の例としてリュクルゴスのスパルタ、ソロンのアテネ、ティモレオンのシラクサをテンプルは挙げる。また、圧政に反抗した民衆が共和国を作る場合があり、そのような例として、ブルータスのローマとスペインから独立したネーデルラントを挙げている。いずれの場合にせよ、よい共和政は賢明な立法者なり指導者をもつというのがテンプルの考えである。しかしながら、「自然な」父権の安定した權威に比べ、共和政の權威は「人工的」であるため、安定性に欠けるとみる。その例証としてテンプルが引いているのは、記憶に新しい二つの革命、すなわち、英国とネーデルラントの革命である。

英国の場合、六千の軍隊の力を頼りに行なわれた王位篡奪は、結局「国民の一般的意向」によって「古来の合法的政体」に道を譲り、王政復古へとつながった。ネーデルラントの場合は、デ・ウィット政権の諸政策が功を奏したが、オレンジ家の復権に伴い国民の意志は王政復活へと向かい、デ・ウィット兄弟の殺戮によって共和政は劇的に終りを告げた。テンブルが『統治の起源と本質』を書いたのは、正にネーデルラント王政が復古した一六七二年であり、この事件を期に彼は共和政批判および「古来の政体」支持の立場を確信したと思われる。また、テンブルの最晩年の作『英国史序説』（一六九四年）は、ノルマン人の征服をこの国の古来の政体の成立とするもので、『統治の起源と本質』に表明された見解の延長線上にあるといえよう。

テンブルの政体論は、父権思想においてはフィルマーの、また、人間の本性の思想においてはホッブズの影響がみられるものの、論の展開自体は独自のものである。というのは、父権思想においては王権神授説を排しているし、人間性の思想においては、ホッブズの性悪説あるいはロックの性善説による国家契約論のいずれをも否定しているからである。政治思想史上、名誉革命へとつながる王政復古後の三十年間は議論の余地の多い時期だとされるが、テンブルの見解はハリファックスのそれに近い、コモンセンスを基調とした穏健で中庸な立場として、再確認されるべきであろう。<sup>(6)</sup>

『英雄の徳』(Of Heroick Virtue)

詩才と共にテンブルが人間が能う限りの最高の神的能力と呼ぶものが英雄の徳である。英雄の資質とは「賢明さ、善性、剛毅の点で並の人間をしのぐ、あるもって生まれた気質や才能の優秀さ」<sup>(7)</sup>である。前置きとして西洋の古代の

四つの国家、すなわちエジプト、ギリシャ、スパルタ、ローマについてテンプルは述べるが、興味深いのは一般に英雄とみなされていたアレクサンダー大王とカエサルを真の英雄とはみていないことである。前者はワインと怒りと肉欲において自制に欠け、後者は誠実さの徳に欠けていたからだとしてテンプルはみる。テンプルの本題は、当時あまりよく知られていなかった中国、ペルー、スキタイ、アラビアの歴史であり、それぞれについて一章が充てられている。

中国については、孔子の儒学が高く評価され、マンゴ・コバックのインカ帝国については、未開人に法と文化を教えた功績が讃えられている。英国など北ヨーロッパの起源とも関わるスキタイ帝国の王ティムールは、史上最も優れた英雄のひとりとして絶賛されている。スキタイ論は「ゴートの統治」(Gothic constitution)を英国本来の統治形態とするテンプルの見解がみられる点で、『英国史序説』とともに重要である。永続性はよい統治の証であるが、英国の場合、歴史的に最も持続してきたのが「ゴートの統治」だとテンプルは考える。「ゴートの統治」の特徴は、王の下における「領主」(baron)たちの議会であり、北ヨーロッパに広くみられると、テンプルはいう。「ゴートの統治」とはいいかえれば、土地所有者である自由民による代議制であるが、その長所をテンプルは「支配と自由との間に見出される真に公正な中庸」<sup>(8)</sup>と表現している。

四番目の例であるサラセン帝国は、先の三つとはまったく異なる例として取り上げられている。アラブ人の政体理念は「まことに狂信的であり、ふつうの理性では説明しがたいうえ、多くの点で人間の本性に反してさえいる」<sup>(9)</sup>とテンプルはみる。彼にとつてマホメットが唱えた新しい教理は驚くべき非合理性の産物だが、更に驚嘆すべきは新宗教の伝播の速さである。時代が下りオスマン・トルコの支配になると、絶対主義的統治が基本原理となる。テンプルはトルコ帝国の統治原理を列挙している。君主はマホメットの末裔で絶対的な立法権と司法権を有すること、土地所有・称号などの世襲を一切禁じたこと、キリスト教徒を近衛兵に育成すること(イエニチュェリ)による改宗政策、

「ひとりの罪人を生かすよりふたりの無実の民を殺すべし」の方針に基づく即決裁判制度などである。始祖マホメットに対してテンブルは批判的であるが、その後のイスラムの諸王の中にはアラビアの王アルマンゾールのようにあらゆる点で英雄の徳を備えた賢王もいたことを認めている。

『英雄の徳』の最後の章は、帝国の樹立の要件についての考察である。まず、征服は北から南へ向かうとテンブルはいう。次に、少数の者が多数を圧倒するという点である。これらの点からテンブルが導く結論は「北方の人間は南方の人間よりも大柄で頑丈であり、健康で力がある」<sup>(10)</sup>ことである。もうひとつの要因としてテンブルは勇敢さを挙げることが、これらの指摘は最終的に、一国の軍隊の編成のための指南となっている。帝国の樹立に優秀な軍隊は不可欠であるが、征服という行為そのものは英雄の徳としては二流のものであって、公平な法の制定こそが安定した国家の条件であり、一流の英雄の徳の証である、これがテンブルの結論である。

『民衆の不満について』(Of Popular Discontents)

このエッセーはテンブルの政体論の一環であるが、彼の間人観が比較的前面に出ている点で興味深い。政体が不安定化する契機としての国民の不満は、いかにして生じるのか、また、そのような政治体の「病氣」の治療法はいかなるものなのか。これがテンブルの主題である。考察の基礎は人間の本性であり、導入部では動物と人間の相違点といった伝統的トピックについて語られる。テンブルが注目する人間固有の特徴は、この種の議論においてはあまり注意を引かないがしかし重要であると彼が考える点、すなわち、「われわれの本性と体質に全般的かつ不可分に結びついているように思われる、精神と思考のある一定の落ち着きのなさ」<sup>(11)</sup>である。精神の落ち着きのなさは個人の地位や財

産に対する不平のもとになるばかりでなく、党派・扇動・争乱・内乱という形で市民国家を揺るがすことにもなる。この現象は時代と場所を問わず普遍的にみられると、テンプルはいう。

いかに歴史上名高いよき統治であっても、また、それがどのような統治形態であっても、内部から生じる不安定は免れないことを、テンプルは例を挙げて実証する。完全なる政体などありえない。プラトンの共和国もホップズの君主国もハリントンのオセアナも多くの欠陥が指摘されてきた。理想の国家など「万能薬や賢者の石」と同様にあくなき無用の探究であるとさえテンプルはいう。彼の現実主義的悲観論はまた、いい人間が統治するのがいい統治であり、悪い人間が統治するのが悪い統治であるという別の表現に示される。

テンプルが思い描いているのは、おそらく、一六七九年から一六八〇年にかけての王位継承問題を巡る英国政界の分裂であろう。トリーとホイッグの党派が目に見える形となって現れたのはこのときであるが、テンプルは分裂の修復は不可能と判断して政界を引退したのである。このときの分裂の張本人とテンプルがみなしたのはシャフツベリ―だが、『民衆の不满について』の中で繰り返し描かれる「落ち着きのない」不満分子の像は身近な観察を基にしたのだと思われる。

エッセー後半では、テンプルが明らかに批判的だったクロムウェルの革命を初めとする英国の内乱と党派争いを歴史的に概観している。領土戦争、パラ戦争、宗教改革、そして、ピューリタン革命と、事欠かない事例を挙げるうちにやりきれなくなったのか、あるいは、持前の公共の精神が鼓舞されたのか、テンプルは公共の問題について論ずるのはこれが最後であると前置きしつつ、英国の政治体の病の処方箋をいくつか示している。以下にそれらを列挙する。

英国が海軍力を重んじるならば、常時五十隻の戦艦と一万の水兵を配備すべし。

人民は国家の富であるから、人口増進策を採ること。具体的には外国からの移住者を含む土地所有権の登録であ

る。

雇用の促進に国家予算を充てること。特に英国の主たる輸出品目である羊毛の製造を振興すること。

窃盗犯・強盗犯を現行法のように極刑に処していたずらに人口と労働力を減らすより、刑法（の運用）を変えて彼らを生かしておくこと。

公職のかけもちを禁止すること。また、職の売買やコネによる就職斡旋・昇進を止めて、広く人材を登用すること。

西インドなどの植民地への人口流出を食い止めること。また、外国人の移民を容易にするための法整備をすること。

貧民労役所の整備。二十五歳で未婚のものには軍艦建造や貧民労役所建設のために収入の三分の一を徴税すること。

持参金目当ての結婚習慣の改善。これは貴族にみられる悪習で、愛情も伴わないうえ子孫のためにもならない。

どんなに名家の娘でも遺産相続人でない限り持参金二千ポンドを上限とすること。また、持参金二百ポンド以上の者は次男以下との結婚を義務づけること。

これらの提案をテンブルは自重気味に「空想的」(visionary)と表現している。最善政体の企画を夢物語と切り捨てている彼にしては自己矛盾ともいえるような提案を敢えて試みたのは、実はテンブル自身に理念主義的傾向があったからである。しかし、それは彼の引退へとつながった現実の政治への不信と表裏一体のものである。

『モクサによる痛風の治療』(An Essay upon the Cure of Gout by Moxa)は、個人的体験を反映したエッセーで

ある。テンブルは一六七五年から痛風を患い、以後死ぬまでこの病気に悩まされた。痛風は陸軍将校、州知事、閣僚や外交官などの公務員に遍くみられる病気だとテンブルはいう。その原因は四十歳以上という年齢と、そのような職に就く者の多くが裕福な家の出であり、贅沢な食習慣を続けているからだという。一見伝統的な養生訓のようにみえるこのエッセーも、実はテンブル特有の公的関心に裏打ちされている。テンブルは、行政官の業績の好不調は健康状態の結果であることが多いとみる。「政治体」はその運営を司る上級公務員の「体調」に左右されるから、個人の健康上の失調は国家の災禍ともなる。重要な公務を任せる人物を選ぶには、精神もさることながら肉体も、また、能力もさることながら年齢と健康状態も考慮する必要があると、テンブルは説く。<sup>(12)</sup>

四十七歳で痛風が発症したテンブルは、ズーリヘムからインドのモクサによる治療法を聞く。これは我々日本人には馴染み深いヨモギのお灸である。ズーリヘムはこの治療法を、実際に体験したインド駐在のオランダ人行政官から聞いたという。この行政官が同じ病気で苦しむオランダ人のために出版した本を読んで、テンブルはモクサの灸を試す決心をする。テンブルにとってモクサの灸は効き目があったが、特効薬とまではならなかったようである。彼はこの治療法が他の、例えば、フランスにおける馬糞による治療法より優れていたかどうかという点については判断を控えている。鹿角の調合薬、歩行、マッサージ、イラクサの鞭による殴打など、外国人から聞いた治療法を紹介した後、テンブルは結論として、ワインを控える節制が治療の要件であることを指摘する。

『健康と長寿』(Of Health and Long Life)

『モクサによる痛風の治療』と同種のトピックをより敷衍したものがこのエッセーである。テンブルは若い頃、友



人たちと三つの願いが叶えられるとしたら何を望むかという問いかけをした。彼が望んだのは、若者らしくない、健康と平穏と天気によさであった。これらは同種のものだと、テンブルはいう。

というのは、肉体の健康は国家の平和と天気によさに似ているからである。太陽は、少なくともわが国の気候においては、非常に元気づけるものなので、晴れた日は一種の感覚的な快楽、しかも最も無垢な快楽なのである。<sup>19</sup>

快楽は健全な肉体があつてはじめて享受できるとするテンブルは、哲学的エピクロス主義者である。理性による精神的な快楽を説くストア主義は、人間を超えた、あるいは、人間の本性を否定した不自然な思想としてテンブルは批判する。このような哲学的立場の表明を導入部とするこのエッセーの残りの部分では、すべての快楽の源泉である健康が、いかにしてもたらされるのか、どのような場所・習慣・条件においてそれが最も培われてきたのかを考察している。テンブルは十七世紀の多くの「哲学者」たちと同じように、聖書を初めとする古今の権威から長寿の例を引いている。だが、旧約聖書のノア以後、長寿について伝えている話はヘブライの太祖たち、インドのパラモンたち、そして、ヨーロッパ人が発見した頃のブラジル人に関するもの以外に殆どないという。この三つの長寿譚に共通する特徴は、肉とアルコールを摂らない簡素な食餌と、都市の事業とは無縁な田園や牧場での無為自然な生活様式だと、テンブルはいう。同じヨーロッパでも気候に恵まれたフランスやスペインよりも、北方で気候に恵まれない英国のほうが多くの長寿者を生み出しているのは、太陽（今風にいえばより多くの日照時間）が人々を活動的にし、多くの快楽に従事することを可能にさせるため、精力を早めに消耗してしまうからだという。いささか英国びいきの意見だが、テンブルは有名な「オールド・パー」など幾つかの例を引いて自説を補強している。見聞きしたデータからのテンブル

の経験則は「健康と長寿は大抵富者ではなく貧者に与えられた恵みであり、奢侈や不摂生のとりよりは節制の産物である」<sup>(14)</sup>ことである。

一見テンブルの議論は道徳色が強いようにみえるが、このような特徴は同時代の医師たちにも共通する点であって、<sup>(15)</sup>テンブルの社会学的な視点がむしろ強調されるべきであろう。節制の観念ないし実践、慌ただしい世間からの隔絶といった要因は修道僧の生活に典型的であるが、彼らが長生きした例は余りないと、テンブルはいう。その原因は、修道僧は規範に縛られ、もの考え方も狭い領域に限定されているので、自由な精神の活動が妨げられ、意気消沈していることである。修道僧と対照的な例としてテンブルが挙げるのは哲学者である。古代の哲学者は概して長生きだったと彼はみる。生活様式そのものは哲学者と修道士ではさほど変わりがないが、個人の自由な意志でそのような道を選ぶかどうかが大きな違いだという。

風土論の一環としてテンブルが主張するもうひとつの経験的観察は、山岳地域や不毛な土地に体格のよい頑健な人間が育つということである。空気のよさ、そこで採れる穀物や根菜の栄養を一応の理由に挙げてはいるが、断定は避けている。テンブルの主眼は、肥沃な平原や谷間に発達する都会との比較である。作物が豊かな地域では、食欲も自然なしかたでは増進されることがない。それが増進されるのは人工によってであって、その結果贅沢や種々の快楽を生む。肥沃な土地に発達する大都市の多くは疫病などの種々の病気を発生させ、医療の必要を生む。このように論じた後、テンブルは医療の発生から現在に至るまでの歴史を概観する。ガレノスの昔から医者には概して薬よりも理論に頼りすぎてきたので、また、薬草や特効薬の記録保管には無関心で新しい薬の調査にばかり熱心だったので医療はあまり進歩しなかったのだと、テンブルはいう。「流行の治療法というのは渡り鳥のようなもので、ある季節にはよく見聞きするが、季節が変わると姿を消し、まったく別種が現れる」<sup>(16)</sup>。病気にも流行り廃りがあるが、テンブルがよく

り関心を寄せるのは治療法の移り変わりであって、様々な実例を挙げて論を進めている。

健康は何物にも勝る祝福だが、長寿は健康であるという条件が伴わなければ価値がないと、テンブルは考える。医者には有能さと思いやりを兼ね備えてはじめてよい医者といえるのであるが、このような医者を友に持つか、思慮深い友を医者代わりに持つことは、肉体と精神の健康に極めてよい。このように語って、テンブルはこのエッセーを締め括っている。

#### 四 名誉革命と息子の死

テンブルのふたりの存命した子供のうち、娘ダイアナは一六七九年、十四歳で天然痘で死に、残った唯一の子供ジョンは、一六八九年三十四歳でテムズ河に身を投げて自殺した。ジョンの死は名誉革命の混乱した政治的情況と深く関わっている。ジョンは一六八五年九月、ユグノーのフランス人女性と結婚した。若夫婦は初め、親夫婦と共にシロンの屋敷に住んだが、翌年十一月親夫婦はムーア・パークに移り住んだ。引越しの途上、テンブルはウィンザーにジェイムズ二世を訪ね、自分は忠実な臣民であること、しかしながら公務には二度と就かない旨告げたという。その二年後、革命が起こる。一六八八年十一月、オレンジ公ウィリアムが軍隊を率いて来英すると、ジェイムズ二世はフランスに逃れた。この頃、「ムーア・パークが両陣営の軍隊の通り道にあり安全でなくなったので」、テンブルは息子夫妻のいるシーンに戻った。テンブルは、オレンジ公の英国進軍による名誉革命の企図は知らされていなかったと、マーサ・ギフォードはいう。<sup>(1)</sup>テンブルがハーグ駐在大使時代からオレンジ公とは旧知の仲であり、英国人相談役として信頼されていたことを考えると、これは意外である。

ジョン・テンブルはオレンジ公のトーベイ上陸の際に、いち早く駆けつけて忠誠を誓いたかったが、父親はそれを許可しなかった。「法にもとるようなこと、王室を分断するようなことには決して関与らない」のがテンブルの主義だったからと、マーサ・ギフォードはいう。オレンジ公がウィンザーに來た折、テンブルはジョンを連れて会いに行った。この時、オレンジ公はテンブルに公務への復帰を説き、また、革命成功後には国務卿になってもらいたいことを強く要望したが、テンブルは頑なに断った。新国王ばかりでなく、親しい友人たちもこの拒絶には失望したので、テンブルはひどく心を痛めたという。年が明けて一六八九年四月、テンブルの息子ジョンは、オレンジ公より戦争大臣を拜命する。この経緯の詳細は不明だが、おそらく、テンブルは自分が公務に就かない代わりに、プロテストアント側の大義への奉仕を強く望んでいたジョンを徵用させたのだろう。しかし、大臣拜命から一週間後の四月十九日、ジョンはテムズ河に身投げして自殺した。この事件はたちまちロンドンで大ニュースとなった。

ジョン・テンブルの自殺の背景となったのは、一触即発の状況にあった英愛関係である。当面の問題は、アイルランド総督ターコネル伯（ジェイムズ・タルボット）をどう扱うかだった。すぐに軍勢を送って討伐すべしという好戦論が一部にあったが、オレンジ公の意向は、ひとまずは武力衝突を避けて和平交渉を試みることであった。ターコネルはこの交渉を受け入れる用意があったかにもえた。ジョン・テンブルはターコネルの秘書からその旨の手紙を受け取ったといわれる。もしオレンジ公側が軍勢を派遣せず、また、妥当な条件を提示するのであれば、アイルランドは彼に服従するというのである。さらに、アイルランド王座裁判所首席判事がターコネルの使者として訪英し、ジョン・テンブルと折衝した。もしリチャード・ハミルトン少将をターコネルとの交渉役としてアイルランドに遣わし、有利な条件を示すならば、流血なしにアイルランドはオレンジ公に服する、というのが言い分であった。ジョン・テンブルはターコネル側の主張を信用し、その線に沿って和平交渉をするようにオレンジ公に進言した。ハミルトンは

幽閉されていたロンドン塔から出され、アイルランドに派遣された。ハミルトンは交渉がうまく行かなかった場合、三週間で戻る約束だったが、アイルランドに行った後すぐに、おそらくは自分の使命の達成が至難な状況にあることを悟って、ターコネル側に寝返り、ジェイムズ軍のケンセイル上陸を促すことになった。こうして自ら主張した対アイルランド政策における失態がジョン・テンブルに自責の念を生じさせ、自殺という暴挙に及ぼせたのである。

ところで、息子<sup>(2)</sup>の対ターコネル対策に、テンブルがなんらかの形で関与したのかどうかという肝心な点については全く分かっていない。身内であり、この間の事情をよく知っていたと思われるマーサ・ギフォードは、ジョンの自殺の経緯について書き記したといっているが、その文書はこれまでのところ公表されていない。この悲劇的事件の結果について、彼女は記している。「この嘆くべき出来事と共に、長い間続いた家族の幸運は終りを告げ、何人も人生の終りまでそれが幸福だったとはいえないという摂理が確認されました。この苦痛の後、私自身と家族全員が失意の内<sup>(3)</sup>に、その年の終り、テンブルとその打ちひしがれた家族と共にムア・パークに帰ったのです。」

祖父の代から始まったテンブル家とアイルランドとの関係が、テンブルの息子の死の背景となったのは皮肉である。テンブルの著作の中に息子の死への言及は見当たらない。この事件より二十五年前、息子を亡くしたエセックス侯爵婦人に宛てた悔やみの手紙をテンブルは書いている。過度の嘆きは慎むべきで、すべては神の思し召しと諦め、残された人生を全うするようにと、テンブルは諭している。また、この事件の十五年前に書かれた『英雄の徳』には自殺に関する興味深いエピソードが語られている。駐英スウェーデン大使から聞いた話として伝えているのだが、ゴート人の死を恐れぬ勇猛さが言い伝えられている場所がスウェーデンにあるという。そこは「オディンの間」と呼ばれる山に囲まれた湾で、その昔、年老いたり病気で戦いに出られなくなった兵士たちが、勇敢さを示すために、また、病<sup>(4)</sup>気や老衰で死ぬという「不名誉」を避けるために、海に身を投げたという。テンブルは明らかに、ゴート人の勇猛な

民族性を強調するためにこのエピソードを引いているが、はるかに時代を下り情況も大きく異なる息子の自殺に対しては苦痛と落胆を覚えたに違いない。

## 五 ムア・パーク

テンプルは一六八一年、公務の世界から引退した後、もっぱら執筆と庭作りに勤しんだ。引退先は初めはサリー州のシーン (Sheen) 西部にある屋敷だった。この地所は、テンプルが最初に大陸に外交官として赴任した一六六五年に買い求めた。その後、親しい隣人であるライル卿 (フィリップ・シドニー) から土地を買い足して地所を広げたり、大陸産のサクランボやブドウを移植したりして、かねてから念願であった悠々自適の田園生活を営むにふさわしい舞台を整えていた。<sup>(1)</sup>

一六八五年、テンプルの長男ジョンは結婚したが、以後の二年間シーンの屋敷には父と息子の二世帯が同居した。しかし、老夫婦は閑静な住まいが若夫婦が連れてくる賑やかな仲間たちに乱されるのを嫌って、数年前に買い求めていた同じサリー州のファーナム (Farnham) 近くの地所に移り住んだ。テンプルはこの地所をムア・パーク (Moor Park) と名づけた。命名の由来は、『エピクロス(2)の庭』(Upon the Gardens of Epicurus) の中でテンプルが「今まで見たことのある英国および大陸の庭園の中で最も非の打ち所がない」と絶賛した、ハートフォードシャーのベドフォード侯爵夫人が築いた所領ムア・パークである。テンプルがこの文章を書いたのは一六八五年だが、その三十年前、結婚したばかりの妻ドロシーと共に滞在したのがハートフォードシャーのムア・パークである。このときの印象がいかに鮮明であったかは、三十年後に『エピクロスの庭』の中で、テンプルが克明に庭のレイアウトを描写しているこ

とからも窺われる。

テンブルがハートフォードシャーのムア・パークを理想の庭園と見なしたのは、次の二つの点からである。ひとつには、形と配置が完璧であり美しいこと。もう一つの点は、英国の気候にふさわしいことである。庭園史の上では、十七世紀は整形式庭園様式が支配的であった時代とされるが、そのような幾何学的規則性が作り出す美の典型を、テンブルはハートフォードシャーのムア・パークに見出したのである。しかしながら、様式美はテンブルの美的価値観の全てではなかった。というのは、様式美に対して「全く不規則だが、私を知る限り、他のどれよりも美しいかも知れない形」<sup>(3)</sup>があるのではないかと、テンブルが主張しているからである。部分どうしは調和しないが、全体としてみれば調和するような、自然を活かした庭園様式が存在し、その幾許かを実際見たことがあるが、中国で暮らしたことのある人々からもっと多くのことを聞いて知ったと、テンブルは次のように述べる。

我々の間では、建築と植樹の美は主に、ある一定の均整・対称あるいは均一性に置かれる。我々は小道や樹木をそれぞれが呼応するように、等距離に置く。中国人はこうした植樹のやり方を嫌い、百まで数えられる少年ならば、小道の両脇に直線に等間隔に、好きな長さで巾で植えられるという。ところが彼らの想像力は、その極みに達すると、美しさに目が奪われながらも、誰もその秩序や部分の配置を見てわからないような形式を編み出すように用いられる。我々にはこのような種類の美の概念はほとんどないが、彼らにはそれを表現する独特のことばがある。一目見て気に入ったものがあると、彼らはシャラワッジ (Sharawadgi) はすばらしい、あるいは、見事だなどと感嘆のことばを述べる。極上のインド製ガウン、ないし衝立や磁器に描かれた絵の出来映えを見る人は誰でも、その美しさは皆この種の無秩序な美であることに気づくであろう。<sup>(4)</sup>

この一節にみられるテンプルの美意識の革新性を、建築史家ベヴスナーは「これは幾何学的なものとは根本的に異なる美、すなわち不規則性と想像力による美の可能性をいばん最初に示唆したものである<sup>(5)</sup>」と高く評価している。十八世紀になって本格的に英国で流行するようになったいわゆる「英国式庭園」は、自然な地理的景観を活かす点に特徴があるが、そのような趣味の少なくとも可能性を最初に明確に表現したのがテンプルだった。

造園家としてのテンプルについての同時代人による数少ないかつ貴重な証言は、ジョン・イヴリンによって残されている。イヴリンは、一六七八年にシーンのテンプルの隣人ブロンカー卿の屋敷に行った折、見事な果樹のあるテンプルの庭園を目にしたことを日記に記している<sup>(6)</sup>。その十年後、イヴリンは近くに立ち寄ったついでに、シーンのテンプルの屋敷と庭を訪ね、「最も目についたのはオレンジ栽培の温室と庭園で、垣根にした果樹の植え方と使い方の見事さといったら、今まで見たうちのどれよりもはるかにいい」と、日記の中で絶賛している<sup>(7)</sup>。王立協会の主要メンバーであり、大陸の文化に通じ、他の多くの分野同様園芸にも一言を持っていたイヴリンの観察だけに、信頼に足るものであるろう。

テンプル自身の理想の庭園は、よりロンドンに近く人気も絶えないシーンにおいてではなく、ムア・パークにおいて実現されたものと思われる。ムア・パークにおけるテンプルの庭園がどのようなものであったかを知ることのできる一枚の絵が残されている。これはおそらく、英国の主だった庭園を絵で紹介した『英国図解』(*Britannia Illustrata* [1707])の著者レナード・ニフ(Leonard Kniff)とヤン・キップ(Jan [or Johann] Kip)のいずれかの手によるもので、一六九〇年頃のムア・パークの鳥瞰図である<sup>(8)</sup>。この絵を見ると、ムア・パークには七個の主な区画があり、いずれも長方形を成している。ボウリング・グリーンらしきものが一つ、ノットやトピアリーを盛り込んだ装



飾的花壇が三つ、そして、それ以外は果樹と野菜の栽培に当てられていたものと思われる。

ある庭園史家によればムア・パークはオランダ様式であり、別の歴史家によればそこにはフランス様式の影響が強いという<sup>(10)</sup>。いずれにせよ、テンブルのムア・パークの庭が整形式庭園を基調としていたことに変わりはない。しかしながら、七つの主な区画の外側に、曲がりくねった小川もしくは運河を配した部分があり、『エピクロス<sup>(11)</sup>の庭』で示唆した東洋的な不規則な美の可能性を、テンブルが自ら試した可能性がある。

ジョナサン・スウィフト

テンブルの晩年の十年間は家庭の不幸が続きまとめた陰鬱な時期だったが、まだ無名のスウィフトを秘書として雇ったことは、後世の目から見れば幸運だった。テンブルとスウィフトの主従関係は良好でなかったとの見方があるが、事実はそうでなかったと筆者は思う<sup>(12)</sup>。テンブルは遺言の追記の中で、スウィフトに百ポンドを遺贈した<sup>(13)</sup>。スウィフトによれば、テンブルはさらに、遺稿の管理と出版権を委託したという<sup>(14)</sup>。これらの事実はテンブルがスウィフトを信頼していたことを示すものである。テンブルの政治思想はスウィフトに少なからぬ影響を与えたと思われるが、この点については機会を改めて論じたい。

## 結び

テンブルは五十二歳で公務から引退し、残りの人生を園芸と著述に専念して過ごした。しかしそれは、彼が望んだ

悠々自適の隠居生活とは程遠いものであった。一六八九年には唯一残された息子ジョンが悲劇的な死を遂げ、一六九四年には妻ドロシーに先立たれる。家庭の不幸とは別に、晩年のテンブルの平穩を妨げたと思われるもうひとつの出来事があった。それは一六九〇年に出版した『雑録集第三部』に収められた『古代近代学問論』(An Essay upon the Ancient and Modern Learning) がきっかけとなった、いわゆる「新旧論争」である。この論争はよく知られているので本論では敢えて取り上げなかったが、テンブルの立場を多少なりとも弁護することで本論の結びとしたい。

「新旧論争」とは、古代人と近代人の学問と芸術のいずれが優れているかという問題を巡り、一六八〇年代のフランスに起こり、テンブルのエッセーを期に英国でも繰り広げられた論争である。議論は詩・散文・道徳哲学・自然哲学・医学・天文学・数学・建築術・航海術・地理学など主要な分野全域にわたった。テンブルはこの学問論に対しても政体論と同様、長く持続したものはよいという立場をとった。彼は人間の精神的能力——想像力や発想力——は時代によって差はないと考えたが、過去の知的遺産の蓄積がある分近代人のほうが有利であるという考えには賛成しなかった。この思考法は、過去によい統治が存在したからといって、その例を利用して今の統治が過去よりもよくなっているわけではないと、政体論においてテンブルが説いたのと似ている。この意味で、テンブルの思想には一貫性がある。

しかし、テンブルの『古代近代学問論』は文献学上の大胆かつ誤った主張を含んでおり、その点がたまたま当時の古典学の権威によって見事に指摘された。また、テンブルの古代人擁護の学問論は、より有能で知識もある人物からの反論によって近代派側へと形勢が傾いた。その後テンブルを支持すべく才人たちが再反論を試み、ジョンサン・スウィフトが『書物戦争』を書いたが、この時点で当初の真摯な探究の雰囲気は、相手陣営の人格攻撃へと様相を変えてしまう。

学問論の見地からみれば新旧論争におけるテンブル側の敗北が明らかであることは、この論争の研究史が示すとおりである。テンブルは本分でない領域に足を突っ込んだおかげで恥を晒したわけである。このような状況においてテンブルを弁護することは容易ではないが、以下に二、三の問題点を指摘することで弁護に代えたいと思う。まず、新旧論争の捉え方が一様に「近代の」視点からなされていることである。自然科学の進展、人文学における実証科学的態度、そして、そもそも自然科学と人文学という学問の二分法自体が十八世紀以降に定着したパラダイムであることを考えれば、このような枠組みが成立する以前の時代にこれを当てはめることはホイッグ史観的な誤りではないのか。次に、テンブルの学問論は彼の思想の根幹を成すよい統治の問題と切り離して考えるべきではないということである。学問論の個々のトピックの議論においてテンブルがいかに正確さを欠いているとしても、彼には彼なりの基準があるのであって、これをまったく無視して彼の思想を正当に評価することはできないのではないか。人間の本性の不変と循環史観、このテンブルの二つの観念は統治体における同様学芸における永続性、いいかえれば古さの評価の基礎を成しているともみるべきではないか。第三に、伝記と思想から総合的に人物を評価する方法は古臭いとみなされていることが、テンブルの再評価を妨げていることである。テンブルの場合、外交官としての側面は近世英国（外交）史にとって、また、文人としての側面は文学史にとって、それぞれそれなりの重要性をもつが、いずれにおいても扱われ方はマイナーな人物としてである。このことについては特に異論はないが、いくつかの側面を総合的に捉えることによって初めて重要性が認められるような人物も存在するのではないだろうか。そのような人物のひとりがサー・ウィリアム・テンブルであると筆者は考える。

## 一 テンプル家と生じた

- (1) David Ogg, *England in the Reign of Charles II*, 2nd ed. (1956; rpt. Oxford: Oxford Univ. Press, 1984), pp. 332-33, 337, 557; David Jayne Hill, *A History of Diplomacy in the International Development of Europe*, 6 vols. (London: Longman, 1914), III, pp. 78-81, 135, 146-50; J. P. Kenyon, *Stuart England* (1978; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1983), p. 204.
- (2) K. H. D. Haley, *An English Diplomat in the Low Countries: Sir William Temple and John de Witt 1665-1672* (Oxford: Clarendon Press, 1986), pp. 1-24; Geoffrey Holmes, *The Making of a Great Power: Late Stuart and Early Georgian Britain 1660-1722* (London: Longman), 1993, pp. 99-100.
- (3) Homer E. Woodbridge, *Sir William Temple: The Man and His Work* (N. Y.: MLA, 1940), p. 334. 本書は現在まで最も充実しかつ優れたテンブル研究であり、本論を中心の研究に多くを費やしてゐる。
- (4) Jeremiah S. Finch, *A Catalogue of the Libraries of Sir Thomas Browne and Dr Edward Browne, His Son* (Leiden: Leiden Univ. Press, 1986), p. 75; Geoffrey Keynes, *The Library of Edward Gibbon*, 2nd ed. (St. Paul's Bibliographies, 1980), p. 263; *A Facsimile Reproduction of A Unique Catalogue of Laurence Sterne's Library* (1930; rpt. N. Y.: AMS Press, 1973), p. 9.
- (5) Boris Ford, ed., *From Dryden to Johnson* (1957; rpt. Harmondsworth: Penguin, 1977), p. 128.
- (6) James Boswell, *Life of Johnson*, ed. R. W. Chapman, 2nd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1980), pp. 157, 921.
- (7) 数は少ないが筆者の目に留まったものは次のとおりである。浜林正夫「ウィリアム・テムブルの国家論と経済思想」、『商学討究』第十一卷(一九六〇年)の一—二二三頁。中西輝政「シェントルマン外交」の伝統形成——ウィリアム・テンブルに見るイギリス近代外交の精神——(一)、『法経論叢』第五卷(一九八八年)の一—二十九頁。山口孝道「ウィリアム・テンブルと第三次英蘭戦争」、『富山大学経済論集』第三十五卷(一九九〇年)の一三五—一九〇頁。Ciaran Murray, "The First Romanic: William Temple," 『英語英米文学』(中央大学)第三十四集(一九九四年)三三九—三三九頁。
- (8) テンブルのヌヴァンノへの影響にについては Irvin Ehrenpreis, *Swift: The Man, His Works, and the Age*, 3 vols.

- (London : Methuen, 1962-83), I, pp. 142-53, 169-82, 247-64 ; William Gary Olson, *A "Likeness of Humour" : The Influence of Sir William Temple upon Jonathan Swift* (Ph D dissertation, University of Washington, 1983) (UMI, 1984) 参照。
- (9) Kenneth Parker, ed., *Dorothy Osborne : Letters to Sir William Temple* (Harmondsworth : Penguin, 1987)
- (10) Tom Turner, *English Garden Design : History and Style since 1650* (Woodbridge, Suffolk : Antique Collector's Club, 1986), pp. 66-68-72.
- (11) テンブル家の歴史についてその研究や参照。Haley, pp. 1-24 ; Woodbridge, pp. 1-11 ; John Nichols, *The History and Antiquities of the County of Leicester*, 4 vols. (1795-1811 ; rpt. Wakefield, Yorks. : S R Publishers, 1971), IV, pp. 958-62 ; John Alexander Temple, *The Temple Memoirs* (London : H F & G Witherby, 1925) ; Temple Prime, *Some Account of the Temple Family*, 4th ed. (N. Y., 1899) ; *D. N. B.*
- (12) Thomas Peregrine Courtenay, *Memoirs of the Life, Works, and Correspondence of Sir William Temple, Bart.*, 2 vols. (1836)
- (13) Woodbridge, pp. 5-6.
- (14) Woodbridge, pp. 38-41 ; Parker, pp. 246-51.
- (15) *The Life of Sir William Temple* in G. C. Moore Smith, ed., *The Early Essays and Romances of Sir William Temple* Br. (Oxford : Clarendon Press, 1930), p. 9.
- カーロウのどの辺りにテンブル一家が居住して居たのであるか。D. N. B. のサー・ジョン・テンブルの項には「一六四二年に彼がミーズ州選出議員になったとき「カーロウ州バリナクラス (Ballynacrauth)」居住と記録されている。また一六五八年には「カーロウの町に隣接するモイル、カースルタウン、パークなど総計約一、四九〇エーカーに及ぶ宅地と林野の「二十一年間の借地権」を認められている。ウィリアムは一六六九年に「カーロウ近くのキルバリホウ (Killballyhew) に五六一エーカーの土地を下賜されたという記録がある。」(John Ryan, *The History and Antiquities of the County of Carlow* [Dublin, 1833], p. 187) これより少し後、イギリス人の好古家でスケッチ画家トマス・ティンリーは「アイルランド

を探訪し、日記を残したが、一六八一年にステイブルスタウン (Staplestown) を訪ねた際、この地域はかつてサー・ジョン・テンブルの所領だったと記している。(F. E. Ball, "Extracts from Thomas Dineley's MS Journal of His Visit to Ireland 1680-81," *Journal of the Royal Society of Antiquaries of Ireland*, 43 [1913], 275-309.) ルイスの『アイルランド地誌事典』(一八三七年)によると、ステイブルスタウンは別名バリナキャリグ (Ballinacarrig) とあり、カローウの東北東一マイル、バレン (Burren) 河畔としている。さらに、「サー・ウィリアム・テンブルはステイブルスタウンに居住していた。彼の手紙の多くの発信地となっている彼が住んでいた屋敷の名残りは今でもいくらか残っている」と、ルイスは記している。(Samuel Lewis, *A Topographical Dictionary of Ireland*, 2 vols. [1837; rpt. Galway: Kennys, 1995], "Ballinacarrig") しか  
し、一八三九年のアイルランド最初の正確な土地測量に基づく地図によると、ステイブルスタウンはバリナキャリグに隣接する区域であったことがわかる。また、これらの区域はカローウの東北東ではなく東南東である。筆者の調査では、ルイスが記しているようなテンブルの屋敷の跡を見つけることはできなかったが、この一帯の地理的特徴は起伏のある草地の間をバレン川が蛇行していることであり、ファーマン近くのムア・パークとの著しい類似が確認できた。

(16) *The Works of Sir William Temple, Bart.*, 2nd ed., 2 vols. (London, 1731), p. 287. 以下、テンブルの著作からの引用はこの版による。

二 外交官としてのテンブル

(1) 以下の記述は次のものを参考とした。Woodbridge, chs. VII-XIV; Phyllis S. Lachs, *The Diplomatic Corps under Charles II and James II* (New Brunswick, N. J.: Rutgers Univ. Press, 1965); Haley, op. cit.

(2) *Works*, II, p. 42.

(3) *Works*, I, p. 416.

(4) *Works*, II, p. 458.

(5) *Works*, I, p. 334.

(9) *Works*, I, p. 359.

三 著作

- (1) Jonathan Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall 1477-1806* (Oxford: Clarendon Press, 1995), pp. 3-4; Pieter Geyl, *The Netherlands in the Seventeenth Century. Part Two 1648-1715* (London: Ernest Benn, 1964), p. 194; Haley, pp. 304-12.
- (2) George Sherburn and Donald F. Bond, *The Restoration and Eighteenth Century (1660-1789)* [Vol. III of *A Literary History of England*, ed., Albert C. Baugh], 2nd ed. (N. Y.: Appleton-Century-Crofts, 1967), pp. 808-10.
- (3) 先賢伝通譯明徳家ノコトノチハニニノコトヲ Clara Marburg, *Sir Wiliam Temple: A Seventeenth Century "Liberatin"* (1932; rpt. N. Y.: Folcroft, 1977)
- (4) *Works*, I, p. 85.
- (5) *Ibid.*, p. 100.
- (6) 十ノ世紀後半ノ政体體の情況ニノコトヲ次ニ參照。 J. G. A. Pocock, *The Ancient Constitution and the Feudal Law*, 2nd ed. (N. Y.: Cambridge Univ. Press, 1987); J. H. Burns and Mark Goldie, eds., *The Cambridge History of Political Thought 1450-1700* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1991), chs. III, IV and V.
- (7) *Works*, I, p. 181.
- (8) *Ibid.*, p. 220.
- (9) *Ibid.*, p. 220.
- (10) *Ibid.*, p. 230.
- (11) *Ibid.*, p. 256.
- (12) *Ibid.*, p. 136.

- (13) Ibid., p. 273.
  - (14) Ibid., p. 277.
  - (15) 例、George Cheyne, *The English Malady* (1733; rpt. Delmar, N. Y.: Scholar's Facsimile, 1976), pp. 37-39 參照。
  - (16) Works, I, p. 283.
- 四 各著革命と國王の死
- (一) Martha Giffard, *The Life of Sir William Temple* in Moor Smith, p. 24.
  - (二) シモン・ナンソンの死と國王回復の記録について、C. H. Firth, ed., T. B. Macaulay: *The History of England from the Accession of James the Second*, 6 vols. (London: Macmillan, 1913-15), III, p. 1473; Edward Maunde Thompson, ed., *Correspondence of the Family of Hatton: Being Chiefly Letters Addressed to Christopher First Viscount Hatton A. D. 1601-1704*, 2 vols. (1878), Vol. II, pp. 132-33; Abel Boyer, *Memoirs of the Life and Negotiations of Sir William Temple, Barr.* (London: W. Taylor, 1714), pp. 414-16 [この編、Lamberti, *Memoirs de la Révolution*, II, p. 290ff の翻譯に、Abel Boyer 参照、p. 50]; Narcissus Luttrell, *A Brief Historical Relation of State Affairs from September 1678 to April 1714*, 6 vols. (Oxford, 1857), I, p. 524; Andrew Browning, ed., *Memoirs of Sir John Reresby* (Glasgow, 1936), pp. 575-76.
  - ただし、この事件と国王の死感情をめぐって、T. W. Moody, F. X. Martin and F. J. Byrne, eds., *Early Modern Ireland, 1534-1691* (Oxford: Clarendon Press, 1976), p. 494; F. C. Turner, *James II* (London: Eyre and Spottiswoode, 1948), pp. 393-94; Elizabeth Hamilton, *William's Mary: A Biography of Mary II* (London, 1972), pp. 215-16; Stephen B. Baxter, *William III* (London: Longman, 1966), p. 253; David Ogg, *England in the Reigns of James II and William III* (1955; rpt. Oxford: Oxford Univ. Press, 1984), pp. 247-48.
  - (三) Moor-Smith, *Life*, p. 25.



(4) *Works*, I, p. 216.

五 ムア・ヌート

(1) Woodbridge, p. 59, 114.

(2) *Works*, I, p. 185.

(3) *Ibid.*, p. 186.

(4) *Ibid.* "Sharawadgi" の語の由来は誰がよせしめたか。Takau Shimada, "Is Sharawadgi Derived from the Japanese Word Sorowadji?", *RES*, 48 (1997), 350-52; S. Lang and N. Pevsner, "Sir William Temple and Sharawadgi," *Architectural Review*, 106 (1949), 391-92 参照。

(5) Turner, p. 15 以下 田中 浩 訳。

(6) E. S. De Beer, ed., *The Diary of John Evelyn*, 6 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1955), IV, pp. 142-43.

(7) *Ibid.*, p. 576.

(8) 江戸建築家 Turner, p. 68 以下 藤村 浩 訳。Illustrated London News, 32 (October 2, 1858), p. 302 以下 同報の挿絵面を 藤村 浩 訳。

(9) Turner, p. 66.

(10) Colin Platt, *The Great Rebuildings of Tudor and Stuart England: Revolutions in architectural taste* (London: UCL Press, 1994), p. 56.

(11) David Stuart, *Georgian Gardens* (London: R Hale, 1979), p. 55.

(12) A. C. Elias, *Swirl at Moor Park: Problems in Biography and Criticism* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982); Richard Faber, *The Brave Courtier: Sir William Temple* (London: Faber, 1983), pp. 173-76.

(13) Courtenay, II, p. 486.

(4) Herbert Davis, et al., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 16 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-74), V, p. 194.

結  
ひ

(1) 新旧論争に關しては多くの研究があるが、チンブルとの関連では Josepi M. Levine, *The Battle of the Books: History and Literature in the Augustan Age* (Ithaca, N. Y.: Cornell Univ. Press, 1991) が最も優れた研究である。